
演じる女

imayami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

演じる女

【Zコード】

N3649C

【作者名】

imayami

【あらすじ】

“僕”は彼の死について、彼の彼女であつた少女と話ををする。それは何のための会話か。それは誰のための会話か。

(前書き)

意味なんてありません。

僕は問う。

「君は彼を愛していたね？」

「はい」

「君は彼を憎んでいたね？」

「はい」

「彼は君を愛していたね？」

「おそらくは」

「彼は君を憎んでいたね？」

「おそらくは」

「さて、彼はどうして死んだんだろ？かね？」

「癌でした」

「――ヨークで乳癌で亡くなつた男がいた　　いた。果たしてこれは過去なのだろうか。それとも現在なのだろうか。僕は知らない。分かるとすれば死んだ人がいたという事実は現在に存在する過去の出来事だということ。

彼は僕の親友だった。

そして、今日の前にいるこの少女が彼の彼女。

「癌、ね。それは僕も知っていたよ。問題なのは彼が癌による自然死ないしは病死なのか、それとも自殺なのか他殺なのか、と。そういうことだよ」

「わたしは知りません。しかしわたしは広義での自殺だと　　そう思います」

「そりゃ。とりあえずこれで土台は完成だね」

ペースは揃つた。あとは組み上げるだけ。

「何をするのですか?」

「自己満足の真実探し、みたいな?」

「あなたは彼はどうして死んだと?」

「さて、ね。僕にはそれがまったく想像がつかないからこんなことをしているんだよね。僕がただ彼の死に説明をつけるためだけにこんなことをしていんだよね」

「そうですか」

「じゃあこうしよう。お互に一つずつ、順番に、質問をしようつ

「わかりました」

そう言つて少女は僕の前の椅子に座つた。彼女の手にはあの咲かない椿の栞。彼女は何のためにそれを持ってきたのだろうか。

「では、君からどうぞ」

彼女の質問。

「彼との関係は?」

僕の回答。

「彼は僕の親友 だったよ。こんな感じの答えでいいかな?」

「はい」

「じゃあ僕の番だ」

僕の質問。

「その栞、どうして持ってきたの?」

彼女の回答。

「彼にあの世に持つていって貰おうと思いまして。埋葬する前にと
「そうですか」

「ひつして無感情に機会は巡つていく。
そして不干涉な世界は回つていく。
彼女の質問。

「彼はあなたのことをどう見ていたと思しますか?」

僕の回答。

「わあどうだらうね。彼が君と付き合ははじめてから少し
かなり疎遠だつたからね。その前の話でいいのなら、彼は僕を親友
だと思ってくれていたと思つよ」

しばらくの沈黙の後、彼女は頷いた。
それを見て、
僕の質問。

「彼が死んだ。その実感はありますか?」

彼女の回答。

「理解はしていますが、彼が死んだことがどうこうとかとこう実
感にはまだ至つていません。それにはまだしばらくかかるでしょう。
では、あなたはどうですか?」

同じ質問を返す彼女。彼女の心はかなり死んでいる。能動ではなく受動の質問。

そしてそれに対する僕の回答。

「僕は、どうでしょうね。多分理解はしていますね。ただ実感なんてものはずつとないとは思いますよ。脱線して申し訳ないけど、僕は未だに子供でね、今まで憎んだことがあるのはこの世界と生と死だけだ。今は何も感じてないよ。不感症?」

ふふ、と笑い そして僕の質問。

「じゃあ、君は彼を殺そうと思ったことがあるかい?」

「ええ。彼が癌になつてからはほぼ毎日。その前にも何度もその衝動に、想像だけの実行を伴わないものを感じました。あなたは?」

「一度だけ。彼が君と付き合つと言つた時に。ね。果たして彼は

どんな死を望んでいたと思いますかね?」

「安樂死 でしょう。究極的にはあの時に死にたくはなかつたなではないでしょうか。あなたはどう思いますか?」

「彼は君に憎まれるくらいなら早く死にたかっただろうと思いますね」

僕の質問する。そして自問する。
僕はこの場でどうするべきか。

「彼が死ぬ前の二人の関係はどうでしたか? それまでと比べて」

彼女は視線を少しずらし、回答する。

「以前よりは近くなりました が、とても脆い発泡スチロールのような関係とでも言いましょうか、ひどく空っぽな関係でした。表

面だけは綺麗にあらうとするかのようだ。あなたの方は？」

彼女からの自発的な質問 ではない。それは只の反復。

「変わりませんでしたよ。お見舞いにも数回しか行っていませんし
ね。あまり一人の邪魔をしても仕方がないませんし」

「羨ましいですね。変わらなかつただなんて」

「あなたから見ればそんなのかもしませんね」

僕の質問。

「彼は癌になつて変わりましたか？」

「ええ。それはもう。余命を宣告されれば大抵の人は変わると思
います。彼もやはり泣いていました。わたしによく謝るようになります。
そして、死んだあとのことばかり考えていたのだと思います。
あの世がどうのではなく、わたしやあなたが自分が死んでどうなる
のかと。あなたは自分の死について考えたことがありますか？」

久しぶりに彼女からオリジナルの質問が返ってきた。

「無駄なことは考えないようにしています。僕は死ぬことはコワく
ありません。僕がコワいのは自分です。ただただ自分がコワいので
す。こんな、何も感じない、他人から方向付けをされてはじめて何
かを感じる自分がとてもコワくてカナしいですね。結局僕の中では
死なんて状態の一つでしかありません」

そうだ、この機会に訊いてみよう。

「こんな僕を どう思いますか？」

「わたしは可哀想な人を見れば同情します。よく同情を非難する人

がいますけどあれはなんなんでしょうか。ともかく、わたしはあなたがとても力ナしそうに見えます。あなたがそう感じているように見えるというわけではなく、そんなあなたが力ナしい存在に見えるのです。ここからがわたしの答えですけど、何も感じないという感情がないというあなたを、わたしは許容できません。もしあなたがわたしのように気丈な演技をしているのではなく、心の底から何も感じていないというのならばわたしはあなたを人として許容できません」

彼女の質問。

「あなたは今何かを求めていますか？」

その質問はもはや彼のことではなかった。

「自分が納得できる彼の死の真実を求めます。それだけです」

さあ、これでジグソーパズルのピースは揃った。否、違う。最初からピースは揃っていた。今、それが明らかになつただけのこと。そもそもこのジグソーパズルに答えはない。全て正方形で出来たかのような、まるで積み木のような そんなものだ。必要なのはそれを誰が、どう組み立てるか。それだけ。

僕の質問。

「君は彼を殺しましたか？」

彼女の回答そして質問。

「いいえ。あなたは？」

僕の解答。それは回答ではなく解答だ。この場での僕の持つべき解答。

「はい。彼を殺しました。どうしてそう思いましたか？」

「あなた、彼を愛していましたのしよう？ 増むことなく」

「そうですね。彼は、けれど僕との関係に近親相姦に近いものを感じたのでしょうか。彼との出会いがもつと遅ければよかつたのではじょうかね？ それともただ単に僕だったから、でしょうかね？」

「ひどいのはあなたですよ。何がどうあれあなたが彼を殺したというのなら、その事実に変わりはありません」

「例えば？」

「なんでしょうか？」

「例えば 僕の言ったことが全て虚言で彼は自殺だったのだとしたら、 だとしたらあなたはどうしますか？」

ルールを破戒。僕は質問をした。

「今はわたしの番だと思っていましたが。まあ、けどわたしには結局は何も分からぬのだと思います。あなたが真実を語っているのか、虚構を演じているのか、わたしには皆目わかりません。けれど彼を殺したと言ったあなたの存在をわたしは許しません。それをわたくしが事実だと認識した時点で全ては噛み合つたのですから。だからわたしはそれを事実と認めます。それを覚えておいて下さい。わたしはあなたが嫌いです」

「彼の死と僕が何の関係もないとしても？」

「あなたは言いました。この会話が自分を納得させるためだと。きっとわたしも同じ いえ、似ています。わたしはきっと彼の死を誰かの責任にしたかつたんですよ。全てを転嫁したかつたのです。それが、あなたです。わたしにはそれで十分です。例えそれが主觀

的な思い込みに過ぎなくても構わないのです。わたしはあなたを呪います」

「そうですか。ではきっと僕が彼を殺したのでしょうか。そうすれば全ては綺麗にはまります。僕は彼にフラれ、彼は君と付き合い始めた。そのとき感じた殺意を抱き続けたまま時間は経過する。そして僕は癌で死にかけの彼を何のためか殺した。僕は彼を殺したことでも君に怨まれる。そういうこと」

全ては闇の中。それが今回の僕の解答。

彼女は立ち上がり棺桶の中へあの咲かない椿の朶を入れ、去つていった。

僕はこれから何を演じようか。
普通の女性を演じようか。
それとも……。

(後書き)

ちなみに「咲かない椿」「ジグソーパズル」「ニューヨークで乳癌亡くなつた男」の三題で書いたなんですが、お題が目立つてないといふ…………。

あ、それとの内容は作者の主義・信条とは関係がありませんのであしからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3649c/>

演じる女

2010年10月15日23時38分発行